

賢老人と愚老人

——現代の老年心理学序説——

心理学部臨床心理学科 鳥山平三

抄録：老年期の心の在り方について、限られたものではあるが、民話や童話等に登場する主人公の行動に糸口を見出そうとした。老人たちの肯定的な行為や否定的な振る舞いに様々な教訓を得ることができた。賢明で正直で優しい老人は福を授かり、その逆に愚かで邪悪で冷酷な老人は罰を受けるのである。当然のことではあるが、老いても悲しい性（さが）の老人たちも多い、老醜よりも人生の終焉は美しくありたいものである。脳は生涯発達するのである。神経回路を豊かに増殖させ、活用させる方策を老年心理学は探究すべきである。

キーワード：賢老人、愚老人、民話、童話、脳

はじめに

「老年心理学」(geropsychology)とは、老年期の人、高齢者に関する心理学のことである。老年期は衰退の時期であり、また喪失の時期とも言われる。同時に老年期は完熟の時期であり、人生の終末に向かってそれまでの経験に裏付けられて、仕上げをする時期とも言われる。身体的な老化現象は如何ともし難いものであるが、その体力の衰えや疾病、そして、不可逆的な障害にも見舞われやすく、行動するにも様々な困難を身に受ける時期でもある。

現代は超高齢化社会と言われ、平均寿命は過去最長に達したようで、2008年の日本人のそれは女性が86.05歳、男性が79.29歳と、ともに3年連続で更新していることが、厚生労働省が発表した「簡易生命表」で分かった。女性は24年連続で世界一を維持しており、以下、香港(85.5歳)、フランス(84.3歳)、スイス(84.2歳)、イタリア(83.98歳)と続いている。一方、男性は前年の3位から4位となったが、アイスランド(79.6歳)、スイスと香港(79.4歳)の次で、後にスウェー

デン(79.1歳)が続いている。しかし、その裏で三大死因と言われるガンと心臓病と脳卒中の罹患率は高いままで、男女ともに5割を超えているということである。とは言え、医療の進歩は目覚ましく、“decease”(死亡)を減らし、“disease”(疾病)を増やしたと、複雑な現況を招いている。

さて、WHO(World Health Organization; 世界保健機関)の規定によると、65歳以上を老年期とするようであるが、上に述べた最新の平均寿命からすると、女性で20年以上、男性で約15年もの長い老年期があるということになる。しかし、心身が健康である状態での長生き(健康寿命)となると、何年かは割引きされることになるであろう。

老年期(stage of senescence)をさらに老年初期(65-74歳: young old)、老年中期(75-84歳: middle old)、老年後期(85歳以上: old old)の3つに区切ることもある。この初期と後期とでは最大20年以上の差があるので、心身の状況や周囲の様相は著しく異なっていると言えよう。

「老年心理学」の対象とする課題は、高齢者の知覚、記憶、知能、人格、神経心理テスト、定年

退職期の適応やその後の就労、家族関係、老婚や性、老人学級などでの生涯学習、喪失体験、悲嘆反応、孤独や死、うつ病、自殺、犯罪、生き甲斐、QOL (Quality of Life: 人生の質、生活の質) 等々と多岐にわたっている。

老年期の心理学的研究の嚆矢はアメリカのホール (Hall, G. S.) の著書 “Senescence: The last half of life” (1922 年) にあるとされている。「老化」とは、年をとるに従って、肉体的、精神的機能が衰えることであるが、その退行的な変化としての記憶力・記憶力や視力・聴力・体温調節などの生理機能の低下、そして、足腰の弱ることなどに伴う日常生活や社会生活上の困難が増して行くことである。その「老化」によって、個人差は大きいとしても誰もが避けられない人生の衰退期について、肯定的な面と否定的な面があることについて論じるのが「老年心理学」である。

少し古い文献であるが、かつて、ハヴィガースト (Havighurst, R. J., 1953) という心理学者は、「老年期の発達課題」として次の 6 項目を挙げている。すなわち、(1) 肉体的な力と健康の衰退に適応すること、(2) 隠退と収入の減少に適応すること、(3) 配偶者の死に適応すること、(4) 自分の年ごろの人々と明るい親密な関係を結ぶこと、(5) 社会的・市民的義務を引き受けること、(6) 肉体的な生活を満足に送れるように準備すること、という訳である。これらは現代においてもまことに納得させられるものではないだろうか。

本稿においては、その老年期の光と影とも言うべき「賢老人」(wise old man or woman) と「愚老人」(foolish old man or woman) のあり方、あるいは表現を変えて、「善老人」(the good old) と「悪老人」(the bad, evil, wicked old) の対比、「正直爺さん、婆さん」(honest old man or woman) と「意地悪爺さん、婆さん」(ill-natured, spiteful old man or woman) の差異について、昔話や説話、童話 (おとぎ話)、神話、伝説といった物語に訊ね、そして、現代社会にお

いて見られる老年期心性の様々な実像に対照させてみたいと思う。

老年期の光と影

『デジタル大辞泉』によると、「老」という漢字で始まる熟語として、肯定的なものとしては、「老健」(老いてなおからだが健康なこと)、「老功」(老成) (経験を積んで物事に熟達していること)、「老師」(年をとった師匠・先生)、「老实」(物事に慣れていて誠実であること)、「老手」「老練」(経験を積んだ巧みな技術・腕前)、「老熟」(長く経験を積んで、物事に熟練すること)、「老舗」(何代も続いている古くからある店)、一方、否定的なものとしては、「老獐」「老猾」(いろいろ経験を積んでいて、悪賢いこと)、「老菊」(盛りを過ぎ、色あせた菊の花)、「老朽」(古くなって役に立たないこと)、「老巧」(経験を積んで物事をするのに巧みで抜け目のないこと)、「老残の身」(老いぼれて生きながらえていること)、「老疾」(年老いることと病気になること)、「老醜」(年をとって姿などが醜いこと)、等々がある。

これらのうち肯定的な表現の熟語から見てくることとは、経験の豊かさに裏付けられた知恵であり、技術・腕前であり、誠実さであると言える。つまりは、「賢老人」、「健老人」、「善老人」、そして、「正直爺さんや婆さん」の姿が反映されている。そのようなことから、「高齢者」の 1 字をもじって「光齢者」と呼ばれたり、小説家の渡辺淳一氏が、2007 年問題と言われる団塊の世代の大量退職に際会して行われた講演 (2007 年) で、「プラチナ世代」を唱えた経緯にあるように、毛髪が抜けてハゲ頭になった光沢はともかく、銀髪の輝きにもたとえられる価値ある存在を、世に再認識させるあり方である。

他方、否定的な表現の熟語からは、折角の経験知が望まれる仕方の方に行動化されずに、悪知恵に働いたり、邪悪さや醜怪さを表す「愚老人」、

「愚弄人」，「悪老人」，そして，「不正直爺さんや婆さん」，「意地悪爺さんや婆さん」として世間からは嫌われ，蔑まれ，厭われる存在となる。

この「老醜」を「老華」に変えようと提案する人がある。昇幹夫（のぼりみきお）（1947-）という麻酔科医・産婦人科医で，「日本笑い学会」の副会長として笑いの医学的効用を研究している人である。「前向きな楽しい極楽トンボの生き方が，高齢社会をダイヤモンドエイジにする長生きの秘訣」と説き，「老いても華がある」人生であることを願い，現在は「元気で長生き研究所」の所長でもある「健康法師」を名乗っている。

賢老人の系譜

「賢老人」（wise old man），あるいは，「老賢者」（old wise man）とは，ユング心理学（Jungian Psychology）における「元型」（archetype）のひとつである。その意味するところは，無意識下にある父親の像である。それは，偉大な父なるもののイメージで，男性にとっては成長の究極的な目標とされるものである。そして，多くの場合，我々の心の中にある「神」のイメージに近くて，英知と指導力の象徴であり，男性性の発達の最終段階と言われるものである。それは，力や理性などを持ち合わせている完成した人間のイメージとなる。そこから，「知恵の導師」とも言われる（鳥山，2009）。

たとえば，仏教の祖である釈迦（紀元前5世紀頃），旧約聖書に登場するモーゼ（Moses）（紀元前13世紀頃），アーサー王伝説に登場する高德の予言者・魔術師マーリン（Merlin），唐代の神仙小説の『杜子春伝』や芥川龍之介の小説『杜子春』の仙人，中国の『真・女神転生（しん・めがみてんせい）』に出てくる太上老君（たいじょうろうくん：老子を神格化して呼ぶ称），ユングの前に現れたとされるフィレモン（Philemon），ドイツのミヒャエル・エンデ（Michael Ende: 1929-95）

の作品『モモ』（Momo）に登場するマイスター・ホラやアメリカのジョージ・ルーカス（George Lucas）監督の映画『ジェダイの復讐』（Return of the Jedi）に出てくるヨーダ，といった存在がそれに当たるだろう。

実在していた人もあれば，伝説として，ある時，特定の場所において起きたと信じられ語り伝えられてきた話の主人公（たとえば，英雄伝説），そして，童話や民話に出てくるお爺さんやお婆さんであるだろう。そのような伝承の中にあるものとして，「七賢人」が有名である。プラトン（Platon, 427?-?347B.C.）によるものとして，紀元前7-6世紀のすぐれた哲人・為政者の7人，すなわち，クレオブロス，ペリアンドロス，ピットコス，ピアス，タレス，キロン，そして，ソロンである。また，中国では晋代に俗塵を避けて竹林に集まり，清談を行った7人の隠士がいた。すなわち，「竹林の七賢」であるが，阮籍（げんせき），嵇康（けいこう），山濤（さんとう），向秀（しょうしゅう），劉伶（りゅうれい），阮咸（げんかん），そして，王戎（おうじゅう）である。あるいは，我が国には福德の神として信仰される7人の神がいるようである。すなわち，大黒天，恵比寿（えびす），毘沙門天（びしゃもんてん），弁財天，福祿寿，寿老人，そして，布袋（はてい）である。

さらに，これは賢人ばかりとは言えないし年齢も不詳であるが，古今集の序にみえる，平安時代初期のすぐれた6人の歌人が有名である。すなわち，在原業平（ありわらのなりひら），僧正遍昭（そうじょうへんじょう），喜撰法師（きせんほうし），大友黒主（おおとのくろぬし），文屋康秀（ふんやのやすひで），そして，小野小町（おののこまち）の「六歌仙」である。そして，藤原公任（きんとう）の「三十六人撰」に基づく36人のすぐれた歌人たちがいる。すなわち，柿本人麻呂，大伴家持，山部赤人，猿丸大夫，紀貫之，壬生忠岑（みぶのただみね），在原業平，素性法師（そせいほうし），坂上是則（さかのうえのこれのり），

藤原興風（ふじわらのおきかぜ）、源重之、大中臣頼基（おおなかとみのよりもと）、源公忠（みなもとのきんただ）、藤原朝忠、源順（みなもとのしたごう）、平兼盛、小大君（こだいのきみ）、中務（なかつかさ）、藤原元真（ふじわらのもとざね）、僧正遍昭、小野小町、紀友則、凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）、伊勢、藤原敏行、藤原兼輔、源宗子（みなもとのむねゆき）、斎宮女御（さいぐうのによご）、藤原敦忠、藤原高光、源信明（みなもとのさねあきら）、清原元輔、大中臣能宣（おおなかとみのよしのぶ）、藤原仲文、藤原清正、壬生忠見（みぶのただみ）、たちである。また、平安時代初期の嵯峨天皇、橘逸勢（たちばなのはやなり）、そして、空海は「三筆」と言われた3人の能書家たちである。いずれも当時の人たちや後世の人々に尊敬の念を起こさせ、お手本となった人たちであろう。

物語の中の老人たち

日夜展開されている現実の人間行動に加えて、いわば虚虚实実の物語の中にも老人たちが登場する。古今東西のお話、叙事、ストーリー、作り話、虚構、フィクション、説話、口碑（こうひ）、伝え話、昔話、童話、民話、伝説、言い伝え、寓話等々の幾つかをひもといて、老人たちの行動に範を得たいと思う。

（1）援助的行為により富や幸を得る老人（柳田国男の『日本の昔話』より、以下同じ）

①「蟹淵と安長（やすなが）姫」

むかしむかし隠岐の島の元屋という村に、年とった一人の樵（きこり）がいた。ある日、安長川の奥に入って、滝の後ろの山で木を伐っていたところ、つい誤って手に持つ斧を取り落して、滝壺の小さな円い淵の中に沈めてしまった。そこへ突然美しい安長姫という若い姫神が現れ、いつも災いをもたらす大きな蟹にその斧が当たり大きな刺の

はえた片方の腕を切り落としてくれたと言う。もう一度この斧を、滝の上から落としてほしいと安長姫に頼まれ、樵はその願い通りに高い所から滝壺に投げ入れた。すると今度は蟹の残った腕を切り落として退治することができた。姫神は大そうに喜び、「これから後は富貴長命、なんなりともそなたの願うまま」と言って、林の中に帰って行ったという。これは「善老人の話」である。

②「鶯（うぐいす）姫」

昔々駿河の国に、一人の爺がいて、山で竹伐って来て色々の器を作り、それを売って渡世にしていたので、竹取りの翁と謂い、又箕作りの翁とも言った。ある日この箕作りは竹林に入って、鶯の卵が巣の中でただ一つ殊に光輝いているのを見つけた。それを大切に家に持って来て置くと、おのずと殻が割れてその中からまことに小さな美しいお姫様が生まれた。鶯の卵から生まれたゆえに鶯姫と名を付けて、自分の子にして育てた。だんだんに大きくなって、後には又とないような綺麗なお姫様になり、光耀くゆえにかぐや姫とも呼ばれた。箕作りの翁の伐って来る竹の節の中には、いつでも黄金が一杯詰まっているようになって、元は貧乏であった老人が、わずかのうちに大そうな長者になってしまった。その長者の美しい姫のところへ、聲になりたいと言って色々の人が尋ねて来たが、いつも長者の親子からむつかしい問いをかけられて、それが答えられないので困って帰って行った。時の天子様はかぐや姫の光り輝くような美人であることを聞き、駿河の国に行き姫を見て、都に上って御后になるようにお勧めになった。しかし、これをさえて辞退申し上げ、その年の秋の八月十五夜に、月の光が清らかに、空一杯に照り渡っている時、真っ白な雲が迎えに来て、かぐや姫親子は富士の山の上から、天へ昇って行ってしまったという。その折に次の一首の歌に添えて、死なぬ薬を天子様に差し上げたそうだ。「今はとて天（あま）の羽衣着る時ぞ君をあはれと思ひ出

でぬる」。これも「善老人」の話であろう。

③「笠地藏」

昔々ある村に、至って心の善い爺と婆とが住んでいた。爺は毎日編笠をこしらえて、町へ出て売って暮らしを立てていた。明日は正月という日にも笠を売りに出たが暮の市だから笠などは少しも売れなかった。しかたがないので笠を背負ってもどって来ると、ひどい吹雪の中で野中の地藏様が、濡れて寒そうに立っていた。これはお気の毒だと思って、6つある笠を6つの石地藏様に着せてあげた。そうして家に帰り婆にその話をして、何もする事がないのでそのまま寝てしまった。そうすると年越しの夜の明け方に、遠くの方から櫓（そり）を曳く音がして、歌の聲が聞こえて来た。「六台の地藏さ、笠取ってかぶせた、爺あ家はどこだ、婆あ家はどこだ」と言って、櫓を曳く声が、段々と近くなって来るので、起き出して、ここだここだと言うと、戸の口へどっさりと、宝物の袋を投げ込んで置いて、6人の地藏様が帰って行く後ろ影が見えたそうだ。これも「善老人」、「優しい老人」の話である。

(2) 困っている若者を老人が援助するという物語

①「悪魔と悪魔のおばあさん」(『グリム童話』)
昔々、軍隊にいた3人の兵士が給料が安いといって脱走した。しかし、大きな麦畑で軍隊に囲まれてしまった。そこへ火の竜（悪魔）がやって来て助けてくれた。そして、お金がいくらでも出る鞭を授けてくれた。7年たって、悪魔が出すなぞなぞに答えられたら3人は見逃してもらえることになった。困っていると、そこへ悪魔のおばあさんが現れ、なぞなぞの答えを教えてくれた。その答えとは、＜地獄での食事が尾長猿の牝＞、＜匙が鯨のあばら骨＞、＜コップが馬の足首＞であるという。その通りに悪魔に謎解きをすると、悪魔は退散し3人は救われた。つまり、おばあさんの方

の悪魔は実は「善魔」で、援助的な存在だった。

②「農夫とその子どもたち」(『イソップ物語』)

働かない3人の子どもたちに、年老いた農夫は「畑の中に宝物が隠してあるので、収穫を終えたら深く掘り起こしてみよ」と言って亡くなった。言われた通りに3人は畑を深く掘り起こしたけれども、宝物は何も出て来なかった。しかし、翌年の収穫は大豊作であった。畑がよく耕され、土が深くやわらかく、肥料がよくゆきわたったからであった。老父の遺言は後になって効き目が現れるというありがたいものだった。「賢老人」の知恵と言えるだろう。

(3) 生き物を助ける老人の物語

①「猿と猫と鼠」(『日本の昔話』)

昔々ある所に、爺と婆がいた。婆は精出して木綿を織ると、それを爺が風呂敷に入れて、方々の町を売り歩いていた。ある日爺は木綿を売りに出て、山道にさしかかると、はるか向こうの山の木に大きな雌猿がいて、それを猟師が鉄砲で撃とうとしていた。雌猿は手を合わせて助けてくれと拝んでいた。それを見て爺が留めに行くと、狙いが反れて爺の肩先に弾が当たった。猟師は逃げて行ってしまうと、どこからともなく多くの子猿が現れて、一生懸命に介抱をしてくれた。そうして猿の家に連れて行って、大そうな御馳走をしたそうである。婆が心配しているからもう還ると言うので、猿たちがお礼に宝物をくれた。これは猿の一文銭といって、命の恩人に差し上げると言い、これを祭っておくと金持ちになると言う。そして、木綿を売らずに帰って来た爺を見て、婆は散散に怒ったのだが、猿の一文銭の御蔭でわずかの間に金持ちになった。ところが近所によくない人がいて、知らぬ間にその一文銭が盗まれてしまった。そこで家で飼っている玉という猫に、それを探し出さうにと頼んだ。玉は一匹の鼠を捕まえて、一文銭を見つけたらお前を食べないと言った。そこで、

鼠は方々探し回って、隣の悪者の家の筆筒の中にあるのを見つけて、一文銭を持って来て玉に渡した。玉はそれをくわえて爺様に渡したのである。

②「聴耳頭巾（ききみみずきん）」（『日本の昔話』）

これも昔奥州の方の或在所に、又一人貧乏な善い爺がいて、氏神の稲荷様にいつも生魚を上げたいと思ったけれども、それも貧乏で思うようにならぬので、或る日お社に参って斯う言った。「おれはとても貧乏で生魚も上げることが出来ませんから、どうぞこの俺を食ってください。どうぞお願いでござります」と言って拝んだのである。すると、氏神様は「爺や爺や、何もそんなに心配をすることはいらぬ。俺もお前の難儀していることはよく知っている。それでは一つ運を授けて遣んべ。それこの宝頭巾を遣るから被って見ろ。これを被ると鳥でも獣でも、なんでも言うことが直ぐ解るから」と言って、古めかしい赤頭巾を一つ、その爺に授けた。そうして、まず鳥たちの話を聞いて、爺は八卦見を装い、土蔵の屋根の板に挟まれた蛇を助けて、長患いをしていた長者どんの娘を快方に向かわせ、爺はお礼に三百両をもらった。それから次に、やはり鳥たちの話を聞いて、ある屋敷の離れ座敷の屋根の下で枯れるに枯れることのできない楠の難儀を知った。今度も八卦見を装い、鳥たちから得た話をして、長者の家の者が楠の根株を掘って庭の木の神様に祭ったら、長く患っていた旦那殿は薄紙を剥ぐように日ましによくなったそうだ。この時もお礼に三百両をもらい、それ以後は欲を出さなかったそうである。

（4）善老人と悪老人

①「爺に金」（『日本の昔話』）

むかしむかし或村に、善い爺と悪い爺がいた。ある時善い爺は一人で山に入って為事をしてしていると、何処からともなく取っつかく取っつかくという声が聞こえた。あんまり何度もその声がす

るので、爺は何心なく取っつかば取っつけ、くっつかばくっつけと言うと、不意に両方の松林の中から金と銀とが幾らともなく飛んで来て、肩や背なかにうんという程乗ったのである。それを持って帰って家の中にひろげて、婆と二人で眺めていると、隣の悪い爺が遣って来て、それを見て大そう羨ましがった。

おらもその真似をして宝物を背負って来ようと、次の日は隣の爺が同じ山へ入って行くと案の定左右の山の中から、同じ声が聞えて来た。早速大喜びでくっつかばくっつけ、取っつかば取っつけと言って背なかを出すと、今度は松の樹の上から松脂（まつやに）が飛んで来て、重いくらい悪爺の肩と背なかに付いた。「婆あ婆あ今帰って来たぞ、早く燈火をつけて来て見せよ」と言った。婆は大いそぎで近くまで火を持って来たらその火が松脂にうつって、悪い爺は大火傷をしたそうである。

②「団子浄土」（『日本の昔話』）

昔々ある所に、爺と婆とが又いた。春の彼岸に彼岸団子をこしらえていたところが、一粒の団子が庭に落ちて、ころころと転がって行った。「だんごだんご何処まで転ぶ」と、爺がそう言って追っかけて行くと、「地藏さんの穴まで転ぶ」といいながら、団子はとうとう穴の中に入ってしまった。爺もその後から穴の中へ入って行くと、穴の底は広くて、そこに地藏さんが立っていた。その地藏の前でやっと団子をつかまえて、土の付いている方を自分で食べて、土の付かぬ方を地藏さんに上げた。そのうちに暗くなったからもう帰ろうとすると、地藏さんが「おれの膝の上さあがれ」と言う。勿体なくてぐずぐずしていると、今度は肩の上に、そして、次は頭の上に上がれ、と言う。思い切って地藏の頭の上にあがると、一本の扇を地藏さんが貸してくれた。「今にここへ鬼共が来て博打（ばくち）を始めるから、よい頃にこの扇をたたいて、鶏の鳴く真似をしろ」と教えられた。案の如く大勢の鬼が遣って来て博打を始めたから、

しばらくしてから地蔵のいう通りに鶏の鳴く真似をすると、そろそろ夜が明けると鬼共は大騒ぎをして、銭や金を沢山に残して置いたままで、皆逃げて行ってしまった。それで爺はその金や銭を地蔵さんに貰って、喜んで家に帰って来た。

うちでは婆が待っていて、二人でその銭金をひろげて見て大喜びをしていると、ちょうど隣の婆が遊びに来てびっくりした。どうしてこの家では、急にその様に福々しくなったのかと聞くので、正直な爺は有りのままの話をする、「それならおら家の爺も地蔵さんの穴へ遣るべちゃ」と言って、急いで帰って二人でわざわざ団子をこしらえた。その団子を庭に転がしても転がらないので、足で蹴って穴に入れ、地蔵さんの前で土まみれの方を供え、勝手に地蔵さんの膝から肩へ、そして、頭の上にあがり、貸すとも言わないのに扇を奪い待っていた。やはりその日も鬼共が集まって来て、博打を始めたので、早速扇をはたいて、鶏の鳴く真似をすると、鬼共はあわてて逃げ出した。一匹の小鬼が逃げ損ねて、囲炉裏の鉤（かぎ）を鼻の穴に引っ掛けて大きな声を出したので、爺がくすくすと笑ってしまった。そこで鬼共は探し回って爺を見つけひどい目に遭わせたのである。やっと命だけを拾ってほうほうの体で逃げて帰ったという。

だからあんまり人の真似はするものではないという話である。

③「瘤（こぶ）二つ」（『日本の昔話』）

むかしむかし目の上に大きな瘤のある坊さんがいて、諸国を修行して或山家の村で泊めてくれる家がないので、仕方なしに古辻堂に入って一夜を明かした。夜もすでに三更（さんこう：およそ現在の午後11時または午前零時からの2時間をいう。子の刻）の頃あいに、多くの人の足音がして、この堂に入って来る者があった。よく見るとそれは天狗さんで、ここに集まって酒盛りをするのであった。じっとしていられなかったので、坊さんも出て行って一緒に踊ったのである。明け方に天

狗は帰ろうとして、「おまえは面白い坊主だからこの次もまた来てくれ。しかし、約束をしてもうそをつくといかぬからこれを質に取って置く」と言って、目の上の瘤をむしり取って持って行ったのである。坊さんはうるさいと思う瘤を取られて、おお喜びで故郷に帰って来た。

ところがその近所に又一人、同じところに瘤があって困っている坊さんがいた。先の坊さんの話を聞いて、羨ましくなり自分もその辻堂に出かけて行った。案の如く夜ふけに天狗が集まってきて酒盛りをし出したので、出て行って踊り出したところ、天狗たちは大変喜んで「おお坊主、よく約束をまちがえずに又来てくれたな。大きに御苦労であった。それでは質に取って置いた瘤を返すぞ」と言って、その坊さんの顔にくっつけてしまった。坊さんは瘤が二つになって、余計な人真似はしない方がよかったと、いつ迄も後悔をしていたそうである。これはよく知られた「瘤取り爺さん」という話と同じである。

④「奥州の灰まき爺」（『日本の昔話』）

この昔話のストーリーの展開は、これもよく知られた「花咲か爺さん」の話に非常によく似ている。したがって、ここでは詳細は省くことにする。

（5）意地悪婆さんと怖い魔女

①「舌切りすずめ」（楠山正雄『日本の神話と十大昔話』より）

お爺さんに助けられて可愛がられていた雀は、お婆さんが障子の張り替えに使おうとしていた糊を食べてしまい、舌を切られて逃げ出した。その雀をお爺さんが追って山へ行くと、雀たちが恩返しにご馳走してくれたり、踊りを見せてくれた。お土産として大小2つのつづらのどちらを持って行くかを聞かれ小さい方を持って帰り、家に着いて中を見ると小判が詰まっていた。

欲張りなお婆さんは大きなつづらをもらおうと雀の宿に押しかけ、大きい方を強引に受け取って、

帰り道で開けてみると中には妖怪や虫や蜥蜴や蜂や蛙や蛇が詰まっており、お婆さんは腰を抜かして気絶してしまった。(妖怪に食べられてしまうという説もある。)

②「ヘンゼルとグレーテル」(『グリム童話』)

昔ある所に樵(きこり)の一家がいた。夫婦と子どもが兄妹の二人で、貧しいゆえに明日の食べ物にさえ事欠く生活だった。ある夜に子どもたちは寝静まったと思い、母親はひそひそ話で父親に二人の子どもを森に捨てに行く相談をしていた。兄の方がそれを聞いてしまい、妹にも知らせ、次の日の朝に家の外に出てきらきら光る小石を拾って沢山ポケットに入れた。親が出かけるぞと言って、二人の子どもを連れ出し、森の奥深くに入って行った。かなりの距離を歩いたところで、親たちは用事を済ませるまでここで待っているようにと言って、手の平の大きさのパンを与えて二人の子どもたちを置いて行った。もう外が暗くなったのに親たちはもどって来ない。心細くなって妹が泣くので、兄は決心して家に帰ることにした。幸い月の光に照らされ、道のあちこちに捨ててきた小石がきらきらと光るので、無事に家にたどり着くことができた。

子どもたちがもどって来てしまったので、夫婦はもう一度同じこんたんで二人を連れ出した。しかし、急だったので兄は光る小石を拾う時間がなかった。仕方がないので、朝食のパンを食べないで持ち出して、小さくちぎって親に知られないようにこっそりと道に捨てて行った。親たちは前と同じように森の奥深く行ったところで、また、用事があるので離れるがここで待っているようにと言って二人を置いて行った。やはり今度も親はいっまで待ってももどって来なかった。妹が泣くので暗くなった道をたどることになった。しかし、捨てて来たパンのかけらは小鳥たちに食べられてなくなり、目印が消えてしまった。二人は途方に暮れて森の中をさ迷っていると、何とお菓子で

きた家があったのである。窓はキャンディー、壁はクッキー、,、といったようにすべてがおいしそうなお菓子でできていた。驚いたことに家の中からお婆さんが出て来て、中に入ったらもっといろいろなお菓子があると、二人を招き入れた。しかし、それは恐ろしい魔女の罠だった。二人を食べるためにまず太らせて、それからかまどに入れて焼き殺す算段だった。二人は魔女の企みを見抜き、知恵を合わせて、魔女がかまどの中を見せようと妹に示そうとしたところで、妹はかまどの中を覗き込んでいる魔女を後ろから押しこんで焼き殺すことに成功した。二人はお菓子の家にあった沢山の宝物を持って、何とかこうとかして家に帰ることができ、親たちを喜ばすことができた。

③「眠れる森の美女」(『グリム童話』)

ある国の国王夫妻になかなか子どもができないでいたところ、ようやく女の子が生まれてお城の中でお祝いの会が開かれた。12人の魔法使いが招待されて祝宴の場に顔をそろえた。しかし、13人目の魔法使いがいきなりやって来て、招待されなかったのを恨み、「王女は糸紡ぎの錘(つむ)に触れて永遠の眠りにつく」と呪いを掛けた。しかし、まだ祝いを述べていなかった12人目の魔法使いが、「永遠ではなく百年の眠りにつくことになる」と修正した。

そこで国王夫妻は、国中の糸紡ぎの機械をすべてかき集めて焼き捨てた。王女が15歳になって、お城の中を歩き回っていると、最上階に部屋があり、そこで一人のお婆さんが糸紡ぎをしているのを見つけた。王女は中に入り、お婆さんの近くに行き、うっかり錘に触れて、その場に倒れ深い眠りに入ってしまった。

それから国王夫妻やお城の人たちも相次いで倒れ、お城には誰もいなくなった。お城の壁には鋭い刺のある茨(いばら)の蔓(つる)が生い茂り、それをかき分けて入り込んだ者たちは出るに出路せずにすべて死に絶えたのである。そして、ちょ

うど百年が経って、一人の若者がその蔓をかき分けてお城の中に入ったところ、ちょうど眠りから覚めた王女を見つけて救い出し、二人は結婚したのである。

この話のタイトルは、「茨姫」とか「眠り姫」と称されることもある。

物語に登場する爺と婆

ここまで興味深い民話や童話の幾つかに登場する老人たちを語ってきたが、多くの場合主に表舞台に現れるのは男の老人たちであることがわかる。外で活動することの多い男たちであるところから、物語の中でも目立って活躍することになるからであろう。そして、被害に遭うこともあれば、思わぬ幸運に巡り合うこともあるのだろう。そこで知恵を発揮することもあるれば、富や財宝を求めて危険な目に遭うこともあり、困っている人や動物に優しい思いやりの心を注ぐことにもなるのだろう。そのような存在の仕方から、「賢老人（老賢者）」と呼ばれたり、「好好爺（こうこうや）」、「物知り爺さん」、「知恵袋」、「御隠居さん」、「生き字引」、「walking dictionary」、「仙人」と言われたりもする。また、その対照に、「愚老人（老愚者）」とか、「意地悪爺さん」、「欲張り爺さん」、「因業親爺（いんごうおやじ）」、「悪魔」等と呼ばれて、嫌われたり恐れられたりもする。そして、自業自得という言葉にもあるように、因果応報の果てにひどい目に遭う結末が待っている場合が多い。羨むことはあっても、恨んだり呪ったり、怨霊や幽霊になって出て来ることはあまりないようである。つまり、罪障や悪行を尽くして滅びるのは男であり、懺悔をして悔悛するのも男に多い。そして、迷妄を払い去って大悟に至るとか、「哲人」とか「賢者」、「勇者」とか「英雄」となるのも大概男であることがわかる。男という存在の仕方がそうなのか、そもそもこのような言葉を作りだしたのが男であるからなのか、物事をあいまいにせずス

パッとドライに切断する在り方がよく窺えるだろう。

一方、女の場合はどうであろうか。上に挙げた物語の中にも幾つか登場しているが、日本語には、「賢女」、「仙女」、「物知り婆さん」、「善女」、「慈母」等といった言葉がある反面、「悪女」、「妖女」、「妖婦」、「鬼女」、「魔女」、「淫婦」、「奸婦」、「毒婦」、「醜女（しこめ）」、「山姥（やまんば）」、といったものがあり、非常に怖い思いに捕らわれるのは筆者だけであろうか。これは男にも言えることであるが、女にも二面性があり、ユングがいきいきと唱えた「元型」の「太母（グレート・マザー）」という概念が当てはまることになる。つまり、グレート・マザーというものには、子どもを産み育て（giving birth and bringing up）、慈しみ見守る（tender loving care）優しい側面と、その逆に貪り食い（devouring）、いじめ（ill-treating）、殺す（killing）といった「恐母（terrible mother）」の側面があるからである。その負の側面の代表が「魔女」であり、「山姥」である。

ところで、長野県千曲（ちくま）市にある冠着（かむりき）山は「姥捨て伝説」で知られている。更級（さらしな）に住む男が、山に捨てた親代わりの伯母を、明月の輝きに恥じて、翌朝には連れ戻しに行ったという話である。「わが心なぐさめかねつ更級や姥捨て山に照る月をみて」（古今和歌集）という和歌にも詠まれている。

深沢七郎の『檜山節考（ならやまぶしこう）』（1956）も「姥捨て山」伝説をベースに、信州の寒村に住む人々を描いている。「山に囲まれた信州のある村。今年も檜山の歌が歌い出される季節になった。村の年寄り七十になると檜山まいりに行くのが習わしで、六十九のおりんはそれを待っていた。息子の後妻も無事見つかって安心したし、山へ行く時の支度は整えてある。・・・孝行息子の辰平は、お供で一緒に行くのだが、気が進まず元気がない。しかし家計を考えて年明けも近い冬の夜、誰にも見られてはいけないという決まり

のもと背中に母を背負って楢山まいりへと出かけていく。辛くてもそれが貧しい村の掟なのであった」。

さて、なぜ「姥捨て」なのか。これは、古来女は山に捨てられて「山姥」になり、髪ふり乱して「人をとって食う」と思われて来たのである。「山爺（やまじい）」とか「山父（やまちち）」というものもあるが、「山姥」ほど恐ろしくはないから、これはやはり「年とった女」は怖いものというジェンダー意識の反映かもしれない。

しかし、民話の世界には知恵も勇気も備えた愛すべき「山姥」が登場する。たとえば、『やまなばのにしき』（松谷みよ子、1967）では、子を産んだ「山姥」が餅を運んで来た村の婆さまに錦を持たせて帰す。また、『花さき山』（斎藤隆介・滝平二郎、1969）の「山姥」は、貧しい少女に「おまえが妹にやさしくしたから花が咲いた」と教える。そして、『蕨（わらび）野行』（村田喜代子、1994）も口減らしのため荒野に送られた女たちが、むざと死なず助け合って生きる物語である。

結局、古来より女の方が男よりも長寿であり、それが徒（あだ）となってこのような「棄老」伝説の犠牲となって来たのではないだろうか。長生きも考えものである。

男女の寿命と脳の差異

「女性は、男性に比べるとはるかに長生きである。平均寿命の男女差は地域によりまちまちだが、中国、アイスランド、エジプトが4年弱、イタリア、ドイツ、スイスなどが約6年なのに対し、日本は6.96年、フランスは7.5年、ロシアは13年も差がある。女性が男性より長生きするのは万国共通で、例外はネパールやヨルダンなど極めて少数だという」（山本、2008）。

因みに、2009年9月15日現在で日本のお年寄りの100歳以上的人是、昨年よりも4,123人増えて、4万399人になっているという。そのうち女

は3万4,952人（昨年より3,739人増）、男は5,447人（384人増）という訳で、女が実に86.5%を占めているのである。最高齢者は、沖縄県の女性で114歳である。ギネスブックによるとこの人が、世界最高齢者だそうである。男性は京丹後市在住の人で、112歳ということである。これでもわかるように、女の方が圧倒的に超長寿なのである。

男と女の間に、これほどまで寿命の差が生じたのはなぜなのか。染色体と脳の性差を主張する大島（1993）によると、男の方が死にやすいのは、染色体のせいだとして、X染色体を一つしか持たない男を「片肺飛行」にたとえている。つまり、X染色体が生命の基本を司る重要な遺伝情報をそなえているのに比べれば、Y染色体は性腺を睾丸に分化させるだけの“矮小（Y小）”な存在なのである。X染色体を飛行機のエンジンにたとえるなら、女は両翼に一つずつ、二個のエンジンを備えており、たとえ片翼のエンジンが機能を停止しても、残りの一つが機能している。これに対し、男の方はエンジン一つの片肺飛行だから、それが機能停止や機能低下すれば、たちまち窮地に追い込まれる。つまり、男は男となるためにY染色体を必要とするのだが、そのY染色体があまり生命力の維持に役立たないために、女より脆弱な存在になっているわけで、まさに「Yの悲劇」ということになる。

また、大島によると、女の生命力が強いのは、脳の働きの差だという。男の脳は、左脳偏重型で右脳が発達せず（普通の女の三分の二ぐらいの大きさしかない）、融通のきかない硬い脳になっているのに対し、女の場合は、左右の脳をつなぐ「脳梁」部分が男に比べて圧倒的に広く、片方の脳を一方の脳で補うという弾力的な「両脳調和型」に発達したという。このため、女は両脳のバランスがとれて安定した考え方ができるため、強い不安感やストレスに強く、自殺も少ない。女が男よりもしたたかに、そしてしなやかに生きているように見えるのは、恐らくそのためなのであろう。

脳は生涯発達する

これまで脳の神経細胞は、生まれる時に約140億個備えていて、その後は減少することはあっても一つたりとも増加しないと言われて来た。そして、20歳を過ぎると、毎日10万個ずつ死滅して新しく生まれることはないと言われてきた。ところが、1998年、スウェーデンのイエーテボリ大学のエリクソン博士は高齢者でも、新しい神経細胞が生まれて増殖することを発見し、従来の定説を書き換えたのである。

記憶を司る脳の海馬という小指サイズの部分が、新しいことに挑戦をし続けると委縮しないことがわかったのである。多くの情報が海馬に入ると、その情報を処理しようとして神経細胞が新しく作られるそうである。いくつになっても読み、書き、そろばん（計算）などは指をはじめ五感を精一杯使って脳を活性化させる、それも楽しんで継続すると脳はまだまだ発達することが証明されたのである。まさに、「老化」を「老華」に変えるチャンスがある。行動し、何かを作る意欲を継続してこそ、「華齢」に生きる老年期の価値があるのである。勤王の志士、高杉晋作の短歌に「面白きこともなき世を面白く、すみなすものは心なりけり」というのがある。真に、至言ではないだろうか。

参考・引用文献

- 深沢七郎 1956 植山節考 新潮社
Havighurst, R. J. 1953 Human Development and Education. Longmans, Green & Co. (庄司雅子他訳 1958 人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで— 牧書店)
楠山正雄 1983 日本の神話と十大昔話 講談社
松谷みよ子作、瀬川康雄絵 1967 やまんばのにしき ポプラ社
村田喜代子 1994 蔵野行 文藝春秋社
昇 幹夫 2008 60歳からの華齢な生き方—加齢を華齢に変えるニコニコ術 保健同人社
野村 法訳 2006 完訳グリム童話集 全7巻 筑摩書房
大島 清 1993 女の脳・男の脳 祥伝社
斎藤隆介作、滝平二郎絵 1969 花さき山 岩崎書店
鳥山平三 2008 コミュニティの変容と臨床心理—都会化における人間模様に光を灯す社会臨床心理学— 風間書房
鳥山平三 2009 ユング心理学における老賢者（オールドワイズマン）と太母（グレートマザー）—河合隼雄先生との縁（えにし）を回顧して— 大阪樟蔭女子大学学術研究会 人間科学研究紀要 第8号 125-142.
渡辺和雄 1982 イソップ寓話集 全2巻 小学館
山本思外里 2008 老年学に学ぶ—サクセスフル・エイジングの秘密— 角川学芸出版
柳田國男 2008 日本の昔話 新潮社

WISE OLD MAN (OR WOMAN) AND FOOLISH OLD MAN (OR WOMAN) : AN INTRODUCTION TO GEROPSYCHOLOGY OF THE DAY.

Osaka Shoin Women's University
Heizou TORIYAMA

ABSTRACT

Many old men and women appeared on the folktales and fairy tales in all-over the world. Wise, honest, kind, and gentle old men and women, while foolish, dishonest, evil and greedy old men and women give us various lessons. It is good chance to become experienced people in the old age. Recently it is said that the brain develops as long as people live. It is important to take action and make something continuously to the very end.

Keywords: wise old men, foolish old men, folktales, fairy tales, the brain